1995. 11. 1

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

日本LD学会会報　第15号

JA LD

事務局：東京学芸大学心理学研究室内　〒184 東京都小金井市貫井北町4-1-1
TEL&FAX. 0423-27-2890

正確な診断と適切な教育

横浜市総合リハビリテーションセンター
佐々木　正　美

子どもたちに無用の差別や劣等感を与えるとして、学習障害（ＬＤ）という診断分類を用いることに反対する人がいるが、私はその考えに反対である。20年近く前に、東京女子医大病院小児科で、臨床心理士の石渡昌子さんたちと協力して、ＬＤ児の特別外来プログラムを始めたのは、正しい診断や評価がなされていなかったばかりに、長い年月にわたって大変な苦悩をしてきた子どもたちとの出会いであった。

彼らは本来何も問題のない子どもたちだという前提で、家庭での養育や躾を、そして学校での教育を受けてきた。その結果彼らは日々、家族や教師から無理な要求や過度の期待をされ続けて、大きな劣等感や自己不全感に苦しみ、疲弊して二次的に重症の心身症や情緒障害の状態にあった。

一般にＬＤ児たちは、種々の機能が仲間と多様に異っていること（あるいは劣っていること）をよく知っていて苦悩している。野球、サッカー、ドッヂボールが友だちのように上手にできなかったり、絵がうまく描けなかったり、ピアニカやリコーダーがみんなのように吹けない。その上、学業も不振である。

そういう苦しみを好意的に理解してくれる人は、家族、仲間、先生のなかにもめったにいない。落ちつきのないこと、不器用なこと、衝動的なことなど、家族でさえも、大抵は子ども自身の責任に帰するような扱いや対応をする。教師は親の躾の悪さに原因を求めようとする。多くの場合が、結果として悪意の誤解である。

20年近くのささやかな経験から言えることは、このような周囲の人たちの誤解がなければ、すなわち二次的な情緒障害が予防できれば、彼らの大多数は成人になった時、一定の職業を身につけて自立的な生活を可能にしていくのである。

近年ようやく、ＬＤ児が善意の人たちによって公的に認知され、適切な学校教育の対応がなされようとしている。待望久しいことであった。

私には二人の不幸なＬＤ児の記憶がある。現在精神病院への入退院をくり返している。彼らは両親によって障害を拒否されたという共通点がある。